

[54] クランコ版『じゃじゃ馬ならし』

～アンチ・エレガンスの新時代バレエ～

2002年2月16日 東京新聞 夕刊

八年ぶりに来日したシュツットガルト・バレエが、ジョン・クランコ振付の『ロメオとジュリエット』と『じゃじゃ馬ならし』を上演した。

バレエといえばまずはエレガントで、少女ならずとも溜息をつきたくなるのがふつうだが、『じゃじゃ馬ならし』のヒロインだけは何ともぶざまな姿をする。それもそのはず、このバレエの原作はシェークスピアのあの有名な戯曲である。手のつけられないじゃじゃ馬お嬢さんが、ひよんな弾みで結婚して、夫から手荒くも賢い調教を受けた結果、短時日でいとも貞淑な奥様に変身したという物語。そのハッピーエンドの裏には、娘のときには一見おとなしそうだだった女性が、結婚するや地金を出して夫の言うことを聞かなくなったという付け足しもあって、じつはこちらのほうこそ古今東西変わらぬ真実を語っているのかもしれない。

それはともかく、言葉のないバレエではヒロインのじゃじゃ馬ぶりを身体で表現しなくてはならない。そこで、エレガンスを旨とするバレエにはあるまじき、はしたないポーズと相成るわけだが、そこはバレエだから、たとえば演劇のように、ただみっともない格好をすればよいというものではない。あられもない姿で音楽に合わせて踊って、それなりに魅了しなくてはならないのである。

あごを突き出し、肩肘上げて、毒づいているキ

[54] クランコ版『じゃじゃ馬ならし』

～アンチ・エレガンスの新時代バレエ～

2002年2月16日 東京新聞 夕刊

ヤタリーナを、求婚者で後に夫となるペトルーチオが抱き取って、頭上へリフトする。彼女はへっぴり腰のまま、足首を直角に曲げ、頭をまっさかさまに落として男の肩に担がれ、くるりと回転する。それが何とも不格好で、笑わずにいられないほど滑稽なのだ。ただ滑稽なだけなら、ドタバタ喜劇で終わってしまうが、それが見事なリズム感とバレエ・テクニクを駆使した動きで、しかもふしぎに愛らしく新鮮だから、笑いながら感心してしまうことになる。まったく、その動きの奇想天外で独創的なことといったら、思わず「今の、もう一度やって見せてよ」と言いたくなることの連続だ。

周囲の人物たちはふつうの礼儀正しい人間という設定だから、それほど度はずれた動きはしない。それがかえって物足りなく凡庸に見えるほど、主人公ふたりの踊りは絶妙である。

クランコは一九七三年、四十五歳で不慮の死をとげたが、今回の来日で上演した二作のほかにも『オネーギン』などが有名だ。だが動きの獨創性という点では、この『じゃじゃ馬ならし』を最高傑作とするべきだろう。

驚嘆して舞台を見ている私の脳裏に、かつてシユツトガルトの稽古場でこのバレエのリハーサ

[54] クランコ版『じゃじゃ馬ならし』

～アンチ・エレガンスの新時代バレエ～

2002年2月16日 東京新聞 夕刊

ルを夢中になって見たであろう若きノイマイヤー、キリアン、フォーサイスのことが浮かんできた。彼らこそは、今や現代バレエの三大巨匠として右に出る者がいない。それぞれに固有のスタイルを持っておりとはいえ、バレエの常識を大きく踏み出した斬新な造型、意表を突く大胆なテクニク、息つく間もなく流動的に組み合わせられた複雑なパ（ステップ）という特徴は共通していて、しかも他の追随を許さない。彼らの作品を見る限りでは、現代バレエはもはやエレガンス一辺倒の古めかしい舞踊ではない。

そのようなアンチ・エレガンスの新時代のバレエを切り拓く上で、彼らが『じゃじゃ馬ならし』を頂点とするクランコ振付に負っているものは決して少なくはないはずだ。現代バレエの巨匠たちが揃ってシュツットガルト・バレエに籍を置いていたことは、決して偶然ではないのである。

クランコがシュツットガルト・バレエの芸術監督に就任してから数年にしてこのカンパニーの名を世界に轟かせたことを指して、人は「シュツットガルトの奇跡」と言うのだが、ノイマイヤー、キリアン、フォーサイスという後継者の仕事までも視野に入れると、「奇跡」の意味も奥行きも、今なお十分に認識されたとは言えないように思う。